

CeMI 気象防災支援・研究センター
News Letter

Contents

1. 立春
2. 2月の暦について ~2月はなぜ28日しかないの?~
3. お天気よもやま話 ~霧が生み出す現象

1 立春

2月3日は二十四節気のひとつ、立春です。二十四節気は太陽の動きによって1年を24に区切って決められており、紀元前6世紀の頃、中国で作られたとされています。立春は二十四節気のうち1年で最初のもので、立春のほか立夏、立秋、立冬も同様に、それぞれの季節の始まりを表すものです。ひとつの区切りとはいえ、二十四節気の起源が大陸にあるため、日本における季節の進行とは異なる印象もあります。立春といっても、この時期ではまだ雪の積もっている地方も多く、晴天が続く太平洋側の地方でも“春”を実感することは少ないかもしれません。

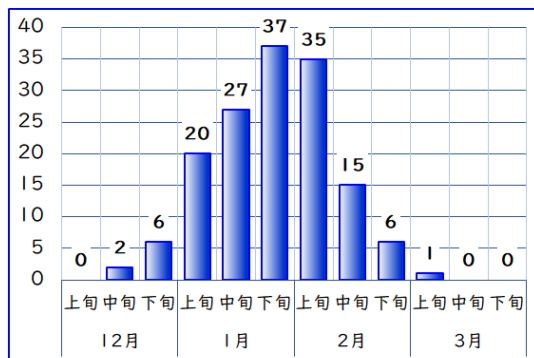
実際にデータでみるとどうでしょうか。日の出日の入りの時刻は地域により多少の違いはありますが、日の出は最も日の出が遅い1月上旬と比べて10分弱しか早くなっていませんが、日の入りは冬至の頃と比べると約40分遅くなっており、確実に日は長くなっています。気象のデータをみると、1年で最も寒い時期は1月の下旬とされています。各地の最低気温の平年値をみても、全国どこでも最低気温の低極は1月下旬から2月上旬です。そして多くの所では2月上旬もちょうど立春を過ぎたところから気温が上がり始めます。わずかな変化ではありますが、春に向かうスタート地点と言えるでしょう。

図は1876年から2024年までの149年間に、東京で冬季、

最も低い気温が観測された日を旬別に表したものです。やはり1月下旬と2月上旬が多くなっています。2月中旬以降、頻度が大きく下がりますので、こうしたことから立春はひとつの区切りとなるのかもしれない。

また、筑波大学の吉野正敏名誉教授らの以前の調査では、天気図で西高東低の冬型の気圧配置が現れる割合は1月の41%に対して2月は31%と減っており、天気図の上でも変化が現れてきます。ただ、立春後も北日本を中心に雪の降ることは多く、太平洋側の地方でも例えば東京では降雪日数は1月より2月が多くなっています。

天気の変化は年々の違いが大きく、暦の通りに進んでいくことはほとんどありませんが、気温の低極である立春のころを過ぎて徐々にですが気温は上昇に転じます。春の訪れも少しずつ近づいています。



東京で冬季、最低気温が最も低かった日の旬別の回数
1876年~2024年の149年間



2 2月の暦について～2月はなぜ28日しかないの？～

2月に入ると、2日が節分、3日が立春（2025年）とあって、暦の上では春の訪れとなってきます。

気象の上でも、最も気温が低い1月下旬を過ぎて、少しずつ気温が上がってきますので、春を感じる時が増えてくる時期です。

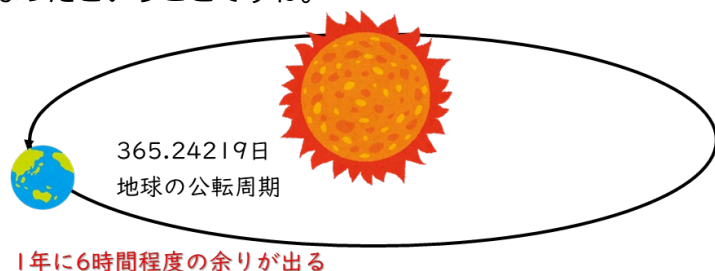
また、日の出も早くなり（ちなみに日の出が最も遅いのは1月7、8日頃）、日没も遅くなって、昼の時間が長くなります。東京では、昼の時間は、冬至ではおよそ9時間44分、2月1日ではおよそ10時間27分となります。2月29日になるとおよそ11時間23分で、この1か月の間1時間も昼の時間が長くなるのですね。太陽高度が高くなって、昼の時間も長くなるということは春へどんどん進む時期であるとも言えます。

ところで、2月は28日（閏年は29日）しかありません。他の月は、30日と31日です。不思議ですね。なぜこのようになったのでしょうか。

現在の暦は、太陽暦が使われています。太陽暦の起源はエジプトにあります。その後の古代ローマ時代に現在の

暦とほぼ同じ形態となりました。その時に、2月が28日（29日の閏年も）としました。その理由としては、現在の2月にあたる月が1年の終わりの月だったためということです（国立天文台より）。いろいろ変遷はあったものの、その他の月を30日と31日としたために残った2月が28日（閏年は29日）となったようです。

閏年については、下図のように地球の公転周期が365日と6時間ほどあるために、おおむね4年に1度、1日閏日（閏年）を設けないとどんどんずれていくことになるためです。前述のとおり、1年の最後の日にプラス1日付けることになったということですね。



3 お天気よもやま話 ～霧が生み出す現象



霧が生み出す幻想的な現象に「気嵐（けあらし）」があります。冷え込みが厳しい冬の早朝から昼にかけて、霧が水面に白く立ち上る現象です。全国各地で見られますが、北海道の留萌や釧路、富山県の雨晴海岸（あまはらしかいがん）などが有名です。

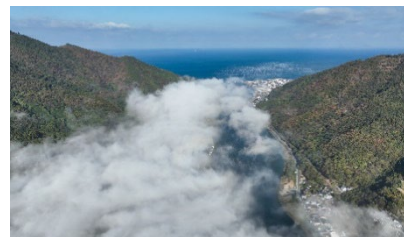
発生メカニズムは、露天風呂や熱い飲み物から立ち上る湯気と同じ。水面から蒸発している水蒸気が、冷たい空気により冷やされて目に見える水の粒（湯気）になることで発生します。気嵐で有名な所はいずれも寒さが厳しい地域。気温が氷点下にまで冷え込んだような日は、水面から湯気がもうもうと立ちのぼり、美しい気嵐となって幻想的な風景を生み出します。

また、霧が生み出す不思議な現象で、川沿いの地域で見られるものに「川あらし」があります。霧が川に沿って嵐のような強風を伴って流れ下っていく現象で、愛媛県

の肱川（ひじかわ）や鹿児島県の川内川（せんだいがわ）、兵庫県の円山川（まるやまがわ）が有名です。10月から翌年の3月ごろまでの朝に見られる現象で、それぞれ「肱川あらし」「川内川あらし」「円山川あらし」といい、これらを「日本3大川あらし」と呼んでいます。

例えば、肱川あらしが起こりやすい条件は、①前の日に湿度が高めで夜間に晴れて風が弱い②放射冷却により朝方冷え込み、大洲盆地に霧が発生しやすい③肱川が流れ込む先の伊予灘の海面温度が高い等があり、これらの条件がそろった朝には、大規模な肱川あらしが発生するそうです。河口付近の海上で気嵐も発生すると、川から海へとつながる壮大な霧が見られることもあるとのこと。一度、見てみたいですね。

霧が生み出す現象を見に行くタイミングとしては、寒い日の早朝がおすすめです。車でお出かけの場合は、まだ暗く、さらに霧の中を運転することになるか、肱川あらし発生時の肱川河口付近の様子もみれません。気をつけて、暖かくしてお出かけください。



掲載内容へのご意見、そのほかサービスに関するご相談・ご要望等ございましたらお気軽にご連絡ください。

NPO法人 環境防災総合政策研究機構(CeMI)

気象防災支援・研究センター

〒160-0011 東京都新宿区若葉1-22口ーヤル若葉105号
<http://www.npo-cemi.com/center.html>

☎ 03-3359-7971

☎ 03-3359-7987

✉ advisory@npo-cemi.com

